

1. 「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。（14:1）
 - a. イエスは弟子たちに、彼らとはいましばらくの間しか一緒におられないこと、彼らのうちの一人が裏切ること、そしてペテロがイエスを知らないと言うことを明らかにされた。弟子たちはイエスの言葉に動揺し、さらに歴史上最も暗く、重く、耐え難い時間が近づくにつれ霊的なプレッシャーもクライマックスに達していたであろう。
 - b. 文脈上イエスは弟子たち、特にたった今失敗を預言されたペテロの動揺を鎮めようとされている。「心を騒がしてはなりません」。私たちは皆人生の苦しい所を通る。自分自身のミスによって、あるいは他人のせいで、または霊的迫害など様々な理由があるだろうが、常にイエスのこの言葉を留めておきたい。「心を騒がしてはなりません」。

2. わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。わたしの行く道はあなたがたも知っています。」（14:2-4）
 - a. そのような状況に置かれた時私たちはどうやって心を騒がさずにいられるだろうか？ このようなことを聞いた後で弟子たちはどうやって心を騒がさずにいられたのだろうか？ 最善の方法は神に信頼することである。ペテロでもなく、自分自身でもなく、今の状況でもなく、ただ神だけを信じるべきである。
 - b. 神がすべてを善きにしてくださること、イエスが忠実でいてくださることを信じよう。イエスはまもなく肉体的には彼らと一緒にいられなくなるが、内側から外側から働いてくださると約束された。イエスは彼らを神の宿る場所としてくださり、また彼らにも神のご臨在がある場所を用意してくださると宣言された。

3. トマスはイエスに言った。「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう。」イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。（14:5-6）
 - a. このトマスの素直さには非常に好感が持てる。他の弟子たちもイエスが何を言おうとされたのかすべては理解できていなかったと思う。トマスは神への道という意味をはっきりと理解しなかったのである。それは私たち一人一人にとっても重要な問題である。
 - b. その道とは多くの律法に従うとか自己実現や前向き思考などによって得られるものではない。イエスは「わたしが道である」と宣言された。イエスはただ私たちに道を示されるためだけではなく、ご自身が道となるために来てくださったのである。
 - c. 真理とはただ事実をいくつも並べたものではなく、人である。私たちの人生の旅路、そしてその意味の追求はすべてイエスキリストというお方の中にある。イエスが道であり、真理である。
 - d. 私たちが人生にイエスを迎え入れ、自分自身をイエスにゆだねる時、人生は私たちの想像を超えたものとなる。イエスの中に永遠のいのちがある。
 - e. イエスは私たちに最大限の、豊かな人生、永遠のいのちを与えるため来てくださった。人生の旅路も啓示もイエスの中にある。